

<原著>

完全主義と強迫症状の関連における 自尊感情の媒介効果の検討

畑中廉 信州大学大学院総合人文社会科学研究科
向井秀文 信州大学学術研究院教育学系

概要

本研究では、自己志向的完全主義の各下位側面と強迫症状の関連における自尊感情の媒介効果の検討を行った。大学生 95 名を対象に質問紙調査を実施し、共分散構造分析を実施した。分析の結果、「ミスを過度に気にする傾向」、および、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」が、自尊感情の低下を媒介して「侵入的思考」を高めることが示された。また、完全主義の各下位側面と強迫症状の関連は一様ではなく、多面的に理解する必要性が示唆された。

キーワード：強迫性障害，完全主義，自尊感情

問題と目的

強迫性障害(Obsessive Compulsive Disorder; OCD)とは、繰り返し生じ持続する侵入的で望ましくない思考、衝動、イメージである強迫観念(Obsession)と、強迫観念や本人の中の決まりにしたがって、繰り返し行われる行動や心の中の行為である強迫行為(Compulsion)を特徴とする精神疾患である(Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th edition; DSM-5, American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳, 染谷他訳, 2014)。強迫観念の高さが強い不安や苦痛を引き起こし、それを打ち消すために強迫行為が繰り返されることが知られている。このような OCD には、発症しやすいパーソナリティ傾向があるとされており(Bejerot et al., 1998), その一つとして、完全主義傾向の高さが指摘されている。実際に, Limburg et al. (2017), Tolin et al. (2006)の研究では, 非臨床群と比較して OCD 患者は完全主義傾向が高いことが報告されている。したがって, OCD の悪化プロセスの背景には, 完全主義傾向といったパーソナリティ特性の関与が示唆されるわけであるが, 先行研究において, 完全主義傾向は一因子で捉えられるものではなく, 複数因子から構成される多面的なパーソナリティ特性であることが指摘されている。例えば, 桜井・大谷(1997)は, 「自分自身に完全性を求める」と定義される自己志向的完全主義(Hewitt & Flett, 1991)に着目し, その特徴を多次元的に測定する尺度(Multidimensional

Self-oriented Perfectionism Scale; MSPS)を作成している。MSPS では、自己志向的完全主義を、「自分に高い目標を課する傾向(Personal Standards; PS)」、 「ミスを過度に気にする傾向(Concern over Mistakes; CM)」、 「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向(Doubting of Actions; D)」、 「完全でありたいという欲求(Desire for Perfection; DP)」の4側面からとらえている。そして、これら4つの下位因子と精神的健康との関連を検討した結果、「ミスを過度に気にする傾向(CM)」、 「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向(D)」、 「完全でありたいという欲求(DP)」は精神的健康の高さと負の相関関係が認められた一方で、「自分に高い目標を課する傾向(PS)」に関しては、精神的健康の高さと正の相関関係にあることが明らかにされている。これらの結果から、自己志向的完全主義の高さと精神的健康の低さとの関連は、自己志向的完全主義の下位因子ごとに、精神的健康との関連が異なることが示唆されている。

さらに、完全主義傾向の高さが、強迫性障害をはじめとした精神的健康の低さを促進するプロセスに関しても多くの検討がなされており、その背景には、自尊感情の低さが媒介変数として機能することが指摘されている。例えば、Miegel et al. (2020)は、完全主義と強迫症状の関連に対する自尊感情の媒介効果を検討し、自尊感情が完全主義と強迫症状の関連を媒介することを報告している。また、完全主義傾向の高さと精神的健康との関連における自尊感情の機能については、抑うつをアウトカムとした場合にも、その役割の重要性が指摘されている。例えば、Sturman et al. (2008)は自尊感情を構成する概念の一つである偶発的自己価値(Kuiper & Olinger, 1989)に着目し、完全主義傾向が高い者は、パフォーマンスを発揮することへの期待に応えることや、絶え間なく努力し常に忙しくしていることの二つに自己価値を見出す傾向があることを報告している。加えて、Flett et al. (1994)の研究では、自尊感情の構成要素の一つである無条件の自己受容の高さが、完全主義傾向の低さと関連することが明らかにされている。

これらの研究から、完全主義傾向の高さが精神的健康の低さを促進するプロセスに、自尊感情の低さが媒介変数として関与していることが示唆される。したがって、OCDの悪化メカニズムに関しては、Miegel et al. (2020)によって報告された知見の妥当性が認められる。しかしながら、Miegel et al. (2020)の研究では、強迫症状を包括的に扱っており、症状ごとの検討はなされていない。強迫症状の多様性、および、完全主義傾向の多面性を考慮すると、それらの関連は複雑なものとなることが示唆される。例えば、指方他(2021)は、パーソナリティから生じる認知としての完全主義を「高目標設置」「完全性追求」「失敗懸念」に分類し、「確認強迫」「洗浄強迫」「不決断」「侵入的思考」といった、四つの強迫症状との関連を検討している。その結果、「完全性追求」と「失敗懸念」が、四つの強迫症状を悪化させる一方で、「高目標設置」は「確認強迫」と「不決断」を抑制することが示唆されている。また、Tolin et al. (2003)は、完全主義を含むOCDに関連する六つの信念と強迫症状の関連を検討し、完全主義がOrdering(整理整頓)と関連することを報告して

いる。さらに、Chik et al. (2008)は、完全主義的パーソナリティの各側面の高さが、OCD治療の効果を変化させることを報告している。具体的には、「行為疑念」の高さが、OCD治療の効果を抑える一方で、「失敗懸念」の高さはOCD治療の効果に影響を及ぼさないことを報告している。しかし、当該研究では、完全主義的パーソナリティの不適應的な側面として指摘されている(Sturman et al., 2008; 小堀・丹野, 2004)、「高目標設置」や「完全性の追求」といった側面は検討されておらず、同様に、強迫症状を細かく分けた検討も行われていない。このように、完全主義傾向と強迫症状との関連は、症状ごとに異なることが明らかにされている。したがって、強迫症状を細分化して、完全主義や自尊感情との関連の詳細を検討する必要があると考えられる。

以上の議論を踏まえると、完全主義傾向と強迫症状との関連には自尊感情が媒介すると考えられる。また、完全主義傾向の各側面と強迫症状との関連は一様ではなく、症状ごとに異なると考えられる。

指方他(2021)は、完全主義認知のうち「完全性追求」が「確認」と「洗浄」の強迫症状を、「失敗懸念」が「侵入的思考」の強迫症状を悪化させる可能性があるとしている。完全主義認知における「完全性追求」を、自己志向的完全主義における「完全でありたいという欲求」、「失敗懸念」を「ミスを過度に気にする傾向」に対応させて考えると、「完全でありたいという欲求」、「ミスを過度に気にする傾向」がそれぞれ自尊感情を媒介し、「完全でありたいという欲求」は「Checking(確認)」と「Washing(洗浄)」を、「ミスを過度に気にする傾向」は「Obsessing(侵入的思考)」を悪化させると予想することができる。さらに、指方他(2021)によると完全主義認知の「高目標設置」は「確認」と「不決断」の強迫症状を抑えるとしている。完全主義認知の「高目標設置」を自己志向的完全主義における「自分に高い目標を課する傾向」に対応させて考えると、「自分に高い目標を課する傾向」が自尊感情を媒介して、また直接的にも「Checking(確認)」を抑えると予想される。また、Tolin et al. (2003)によると完全主義は強迫症状のうちの「Ordering(整理整頓)」と関連があるとしている。Tolin et al. (2003)の研究では完全主義を多次元で捉えていないため、今回は自己志向的完全主義の「自分に高い目標を課する傾向」以外の各側面が自尊感情を媒介し、また直接的にも「Ordering(整理整頓)」を強めると考える。なお、その他の症状においては、現時点では自己志向的完全主義の各側面との関係が不明瞭である。Miegel et al. (2020)の研究にしたがうと、完全主義の「自分に高い目標を課する傾向」以外の各側面が自尊感情を媒介して、また直接的にも強迫症状を増悪させると仮定することができる。本研究の仮説モデルは以下のようになる(図1, 2)。

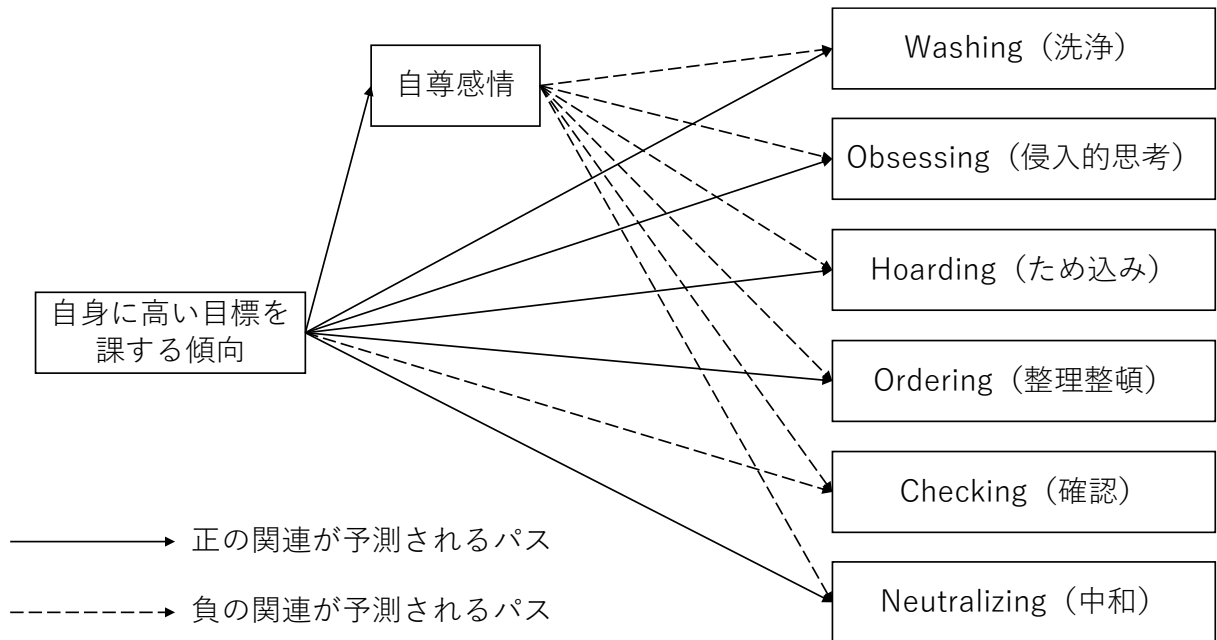


図1 自身に高い目標を課する傾向と自尊感情，強迫症状の関連

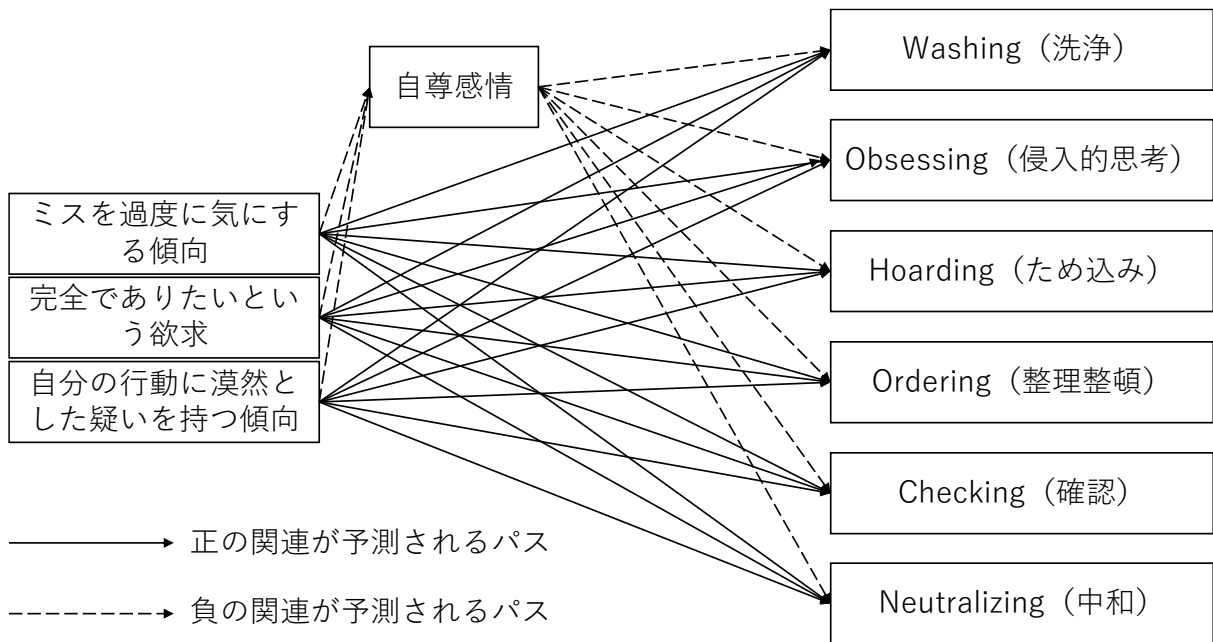


図2 ミスを過度に気にする傾向，完全でありたいという欲求，自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向と自尊感情，強迫症状の関連

以上から，本研究では，これまでに明らかになっている完全主義と強迫症状の関連を確認しつつ，これまでに検討されていない完全主義と強迫症状の関連，完全主義と強迫症状の関連における自尊感情の媒介効果を詳細に検討する。これによって強迫性障害に罹患しやすいパーソナリティの1つである完全主義と強迫症状の関連を明確にし，強迫性障害

治療における一助とすることを旨とする。

方法

調査方法

調査は大学の講義内(講義中ではなく、授業時間以外の時間で回答を求める)、および、縁故法によって研究参加者を募集し、研究参加の同意および研究成果の公表への同意が取れた人のデータを収集した。本研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得ている(管理番号：23-03)。

対象者

18歳以上の者 95名(男性 44名, 女性 49名, 無回答 2名)。

調査材料

デモグラフィック項目 年齢と性別の回答を求めた。年齢については数字を入力することによって回答を求めた。なお、回答しない場合は「0」を入力してもらうよう教示した。性別については、選択肢として「男性」、「女性」、「その他」、「回答しない」の4択を設けて回答を求めた。

完全主義尺度 桜井・大谷(1997)による自己志向的完全主義尺度(Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale; MSPS)を用いた。自己に求める完全主義である「自己志向的完全主義」における“自分に高い目標を課する傾向(PS)”, “完全でありたいという欲求(DP)”, “ミスに過度に気にする傾向(CM)”, “自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向(D)”について、それぞれ「全くあてはまらない:1」から「非常にあてはまる:6」まで20項目6件法で回答を求めた。

強迫症状尺度 Sugiura & Sugiura(2015)によるOCI-R日本語版を用いた。本尺度はFoa et al.(2002)により開発された強迫症状を測定する尺度の日本語訳版であり、Washing(洗浄), Obsessing(侵入的思考), Hoarding(ため込み), Ordering(整理整頓), Checking(確認), Neutralizing(中和)の強迫症状の重症度を、それぞれ「全くない:0」から「非常に:4」まで18項目5件法で回答を求めた。

自尊感情尺度 桜井(2000)によるローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版を用いた。本尺度は自尊感情の測定に最も広く用いられているRosenberg Self-Esteem Scaleの日本語訳版である。回答者の特性的な自尊感情について、それぞれ「いいえ:1」から「はい:4」までの10項目4件法で回答を求めた。

解析計画

まず、本研究で用いた各尺度の記述統計量及び、Pearsonの積率相関係数、各変数の信頼性係数を算出した。次に、完全主義的パーソナリティの各側面と強迫症状の関連に対する自尊感情の間接効果を検定するために、説明変数に自己志向的完全主義の各下位因子得点を、目的変数に強迫症状の各得点を、媒介変数に自尊感情を投入し、共分散構造分析に

よる媒介分析を行った。間接効果の検定は、ブートストラップ法(リサンプリング回数10,000回)を用いた。

結果

各尺度の記述統計と相関関係, 信頼性係数

まず, 本研究で用いた各尺度の記述統計量及び, Pearson の積率相関係数, 各変数の信頼性係数を算出した(表 1, 2, 3)。その結果, 自己志向的完全主義尺度の各下位尺度はおおよそ自尊感情と負の相関, 強迫症状と正の相関が見られた。また, 自尊感情は強迫症状と負の相関が見られた。ただし, 「自分に高い目標を課する傾向」は, Neutralizing(中和)以外の全変数との間に有意な相関が見られなかった。また, 「完全でありたいという欲求」は Obsessing(侵入的思考)との間に有意な相関が見られなかった。さらに自尊感情は, Washing(洗浄)との間に有意な相関が見られなかった。

表 1 記述統計表

変数名	N	M	SD	中央値	最小値	最大値
年齢	95	20.76	1.19	21.00	18.00	24.00
自己志向的完全主義尺度	95	76.91	14.36	79.00	45.00	103.00
自分に高い目標を課する傾向	95	19.99	4.12	20.00	6.00	29.00
完全でありたいという欲求	95	18.67	4.97	19.00	7.00	30.00
ミスを過度に気にする傾向	95	16.58	5.32	17.00	6.00	27.00
自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向	95	21.66	4.70	22.00	9.00	30.00
OCI-R	95	21.67	11.34	20.00	2.00	54.00
Washing(洗浄)	95	2.52	2.48	2.00	0.00	12.00
Obsessing(侵入的思考)	95	3.97	2.50	4.00	0.00	11.00
Hoarding(ため込み)	95	4.78	2.49	4.00	0.00	12.00
Ordering(整理整頓)	95	3.88	2.31	4.00	0.00	12.00
Checking(確認)	95	4.17	3.27	4.00	0.00	12.00
Neutralizing(中和)	95	2.35	2.52	2.00	0.00	11.00
自尊感情	95	25.67	7.33	26.00	10.00	40.00

表 2 各変数の全体得点の相関と信頼性係数

	1	2	3	M	SD	α
1.自己志向的完全主義	-			76.91	14.36	.88
2.OCI-R	.55 **	-		21.67	11.34	.88
3.自尊感情	-.43 **	-.40 **	-	25.67	7.33	.92

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表3 各変数の下位尺度の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1.Washing(洗淨)	-										
2.Obsesseing(侵入的思考)	.41 **	-									
3.Hoarding(ため込み)	.35 **	.36 **	-								
4.Ordering(整理整頓)	.36 **	.37 **	.40 **	-							
5.Checking(確認)	.34 **	.46 **	.44 **	.60 **	-						
6.Neutralizing(中和)	.44 **	.31 **	.46 **	.57 **	.61 **	-					
7.自尊感情	-.12	-.54 **	-.22 *	-.26 *	-.31 **	-.19 +	-				
8.自分に高い目標を課する傾向	.09	-.05	.15	.13	.14	.19 +	.14	-			
9.完全でありたいという欲求	.23 *	.13	.18 +	.50 **	.38 **	.39 **	-.22 *	.49 **	-		
10.ミスを過度に気にする傾向	.24 *	.43 **	.20 +	.47 **	.44 **	.29 **	-.62 **	.10	.55 **	-	
11.自身の行動に漠然と疑いを持つ傾向	.21 *	.44 **	.31 **	.41 **	.60 **	.41 **	-.49 **	.15	.57 **	.56 **	-

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

完全主義的パーソナリティと強迫症状の関連における自尊感情の媒介効果の検討

次に、完全主義的パーソナリティと強迫症状の関連に対する自尊感情の媒介効果を検討するために、説明変数に自己志向的完全主義の各下位因子、目的変数に各強迫症状、媒介変数に自尊感情を投入し、共分散構造分析を行った。説明変数から目的変数への直接効果および、媒介変数を投入したことによる間接効果が有意であったものについて記述する。

まず、自己志向的完全主義の「自分に高い目標を課する傾向」と強迫症状との関連に対する自尊感情の媒介効果の検討を行った(図3)。共分散構造分析の結果にしたがいパスを削除したところ、「自分に高い目標を課する傾向」と自尊感情の間のパスが有意ではなくなった。説明変数と媒介変数の間に有意な関連が見られなかったため、間接効果の検定は行わなかった。

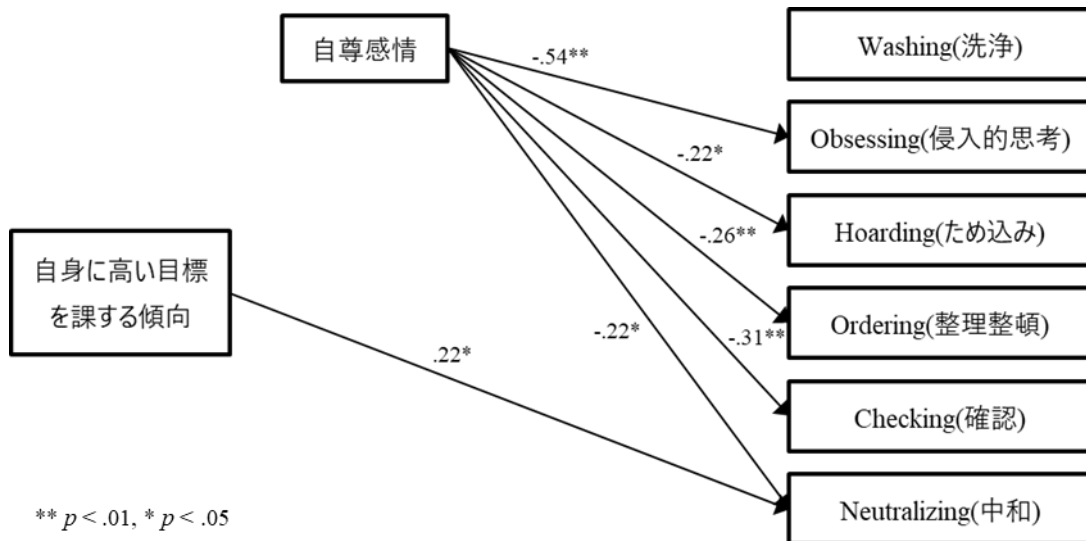


図3 自分に高い目標を課する傾向と自尊感情、強迫症状の関連

次に、自己志向的完全主義の「完全でありたいという欲求」と強迫症状との関連に対する自尊感情の媒介効果の検討を行った(図 4)。「完全でありたいという欲求」から自尊感情を介して **Obsessing**(侵入的思考)へのパスが見られたが、「完全でありたいという欲求」と **Obsessing**(侵入的思考)の直接効果が有意でなく間接効果はなかったと判断した。また、「完全でありたいという欲求」から自尊感情を介して **Checking**(確認)へ伸びるパスが見られた。「完全でありたいという欲求」から **Checking**(確認)への直接効果が有意であったため、ブートストラップ法(リサンプリング回数 10,000 回)による間接効果の検討の結果、95%信頼区間に 0 を含んでいたため、間接効果はなかったと判断した(95%CI: 0.00, 0.12)。

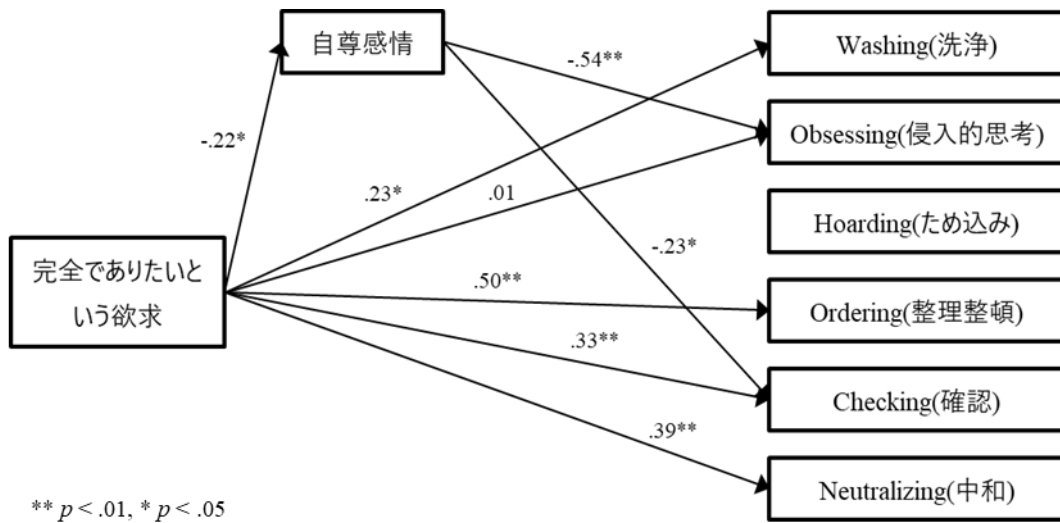


図 4 完全でありたいという欲求と自尊感情, 強迫症状の関連

次に、自己志向的完全主義のうち「ミスを過度に気にする傾向」と強迫症状との関連に対する自尊感情の媒介効果の検討を行った(図 5)。ブートストラップ法(リサンプリング回数 10,000 回)による間接効果の検討の結果、「ミスを過度に気にする傾向」と **Obsessing**(侵入的思考)の関連は有意に自尊感情に媒介された(95%CI: 0.07, 0.21)。

また、自己志向的完全主義のうち「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」と強迫症状との関連に対する自尊感情の媒介効果の検討を行った(図 6)。ブートストラップ法(リサンプリング回数 10,000 回)による間接効果の検討の結果、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」と **Obsessing**(侵入的思考)の関連は有意に自尊感情に部分的に媒介された(95%CI: 0.06, 0.19)。

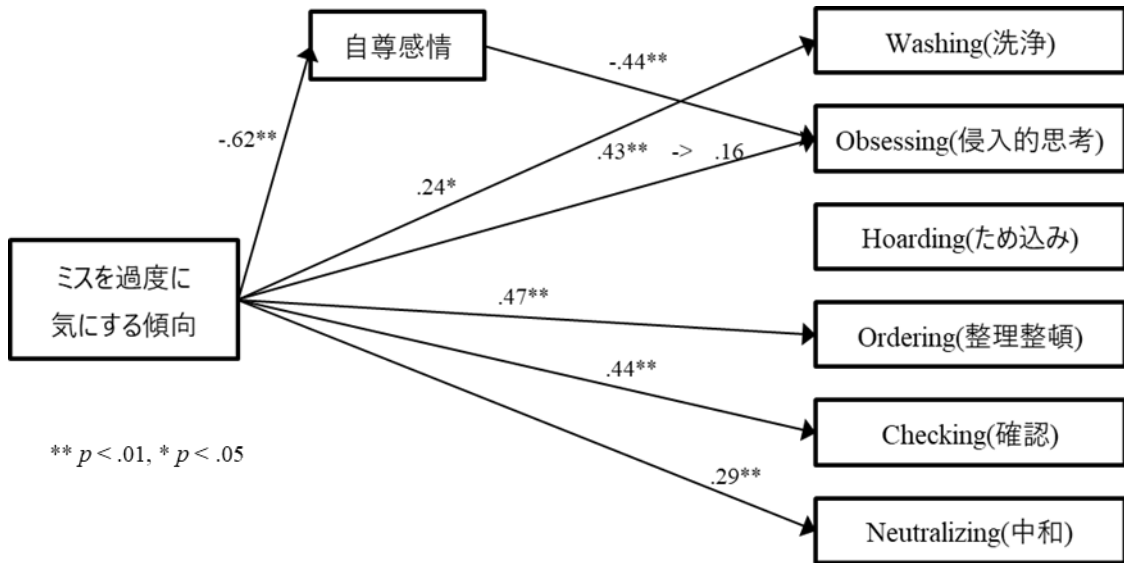


図 5 ミスを過度に気にする傾向と自尊感情, 強迫症状の関連

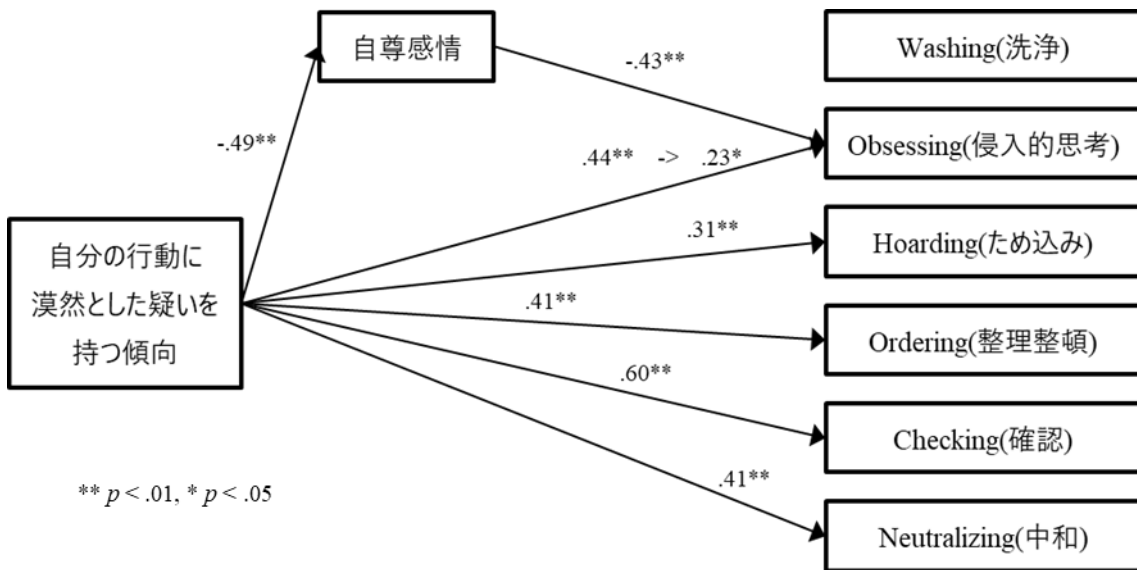


図 6 自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向と自尊感情, 強迫症状の関連

考察

本研究の目的は、完全主義的パーソナリティと強迫症状の関連における自尊感情の媒介効果を検討し、その関連を詳細に明らかにすることであった。完全主義の各側面と強迫症状の関連における自尊感情の媒介効果を検討するために、共分散構造分析を用いて媒介分析を行った。間接効果が見られた強迫症状、直接効果のみが見られた強迫症状に分けて記述する。

共分散構造分析を用いた媒介分析による間接効果の検定の結果、自己志向的完全主義のうち「ミスに過度に気にする傾向」と「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」の高さが、自尊感情を下げ、**Obsessing**(侵入的思考)を重症化させることが示された。指方他(2021)において、完全主義認知の「失敗懸念」は**Obsessing**(侵入的思考)を高めることが示されており、今回の結果は先行研究の結果を支持するとともに、新たに「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」と**Obsessing**(侵入的思考)の関連を示したものであるといえる。**Obsessing**(侵入的思考)とは、取り除くことが困難な特定の思考に執着し、頭の中で繰り返してしまう強迫症状であり、様々な強迫行為を引き起こす強迫観念である。完全主義者が自分に価値を感じる場面として Sturman et al. (2008)は極端なパフォーマンスの期待に応えることを挙げているが、自身の失敗を恐れる気持ちや、自身の行動に疑いを持つといった、自己志向的完全主義のネガティブな部分が出てくると、自身の設定したパフォーマンスへの期待に応えられないかもしれないという気持ちから自尊感情が下がり、強迫観念が強くなるのではないかと考えられる。

続いて、完全主義の各側面と強迫症状の関連において、直接効果のみが見られたものについて考察する。強迫症状のうち **Neutralizing**(中和)は、「自分に高い目標を課する傾向」、「完全でありたいという欲求」、「ミスに過度に気にする傾向」、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」の全てと正の関連が見られた。**Neutralizing**(中和)とは、「何かをするときに、数えながらしなければならぬと感じる。」、「ある数字を繰り返さなければならぬと感じる。」、「良い数字と悪い数字があると感じる。」といった質問項目で測定される強迫症状である。強迫性障害患者が持つとされる6つの信念と強迫症状の詳細な関連を調査した Tolin et al. (2003)によると、強迫性障害と関連する信念のうち、「思考の重要性に関する信念」と「思考をコントロールすることの重要性に関する信念」が**Neutralizing**(中和)を予測するとされている。「思考の重要性に関する信念」とは、ある思考を持つことに重要な意味があると考えた信念であり、ある思考を持つことが外界に影響を与えるという恐れを抱き、思考を取り消すための儀式的な思考を引き起こす。「思考をコントロールすることの重要性に関する信念」とは思考を完全にコントロールすることへの必要性を過度に重視し、頻繁に思考を抑制しようとする信念である。自己志向的完全主義の高い者が強迫観念を抱くと、その思考を完全にコントロールしようとし、儀式的な思考として**Neutralizing**(中和)を行うのではないかと考えられる。次に、「完全でありたいという欲求」、「ミスに過度に気にする傾向」は強迫症状に対してよく似た関連を示し、**Neutralizing**(中和)のほかに、**Washing**(洗浄)、**Ordering**(整理整頓)、**Checking**(確認)への直接効果が見られた。剣持(2005)によると、完全主義認知のうち「失敗懸念」が高まった者は、問題解決を行う過程において、未解決感を抱きやすいという。また、指方他(2021)は、「完全性追求」から影響が見られた確認強迫、洗浄強迫について、「不完全感」によって引き起こされる可能性を指摘している。これらの先行研究と本研究の結果を踏まえると、

自己志向的完全主義の高い者が自身の失敗を恐れたり、自身の行動を完全にしたいという気持ちを抱くと、問題解決のための行動をどれだけ行っても「まだ足りない」と思ってしまい、過剰な手洗い、過剰な整理整頓、過剰な確認行為へと繋がってしまうのではないかと考えられる。そして、「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」は、Neutralizing(中和)のほかに Obsessing(侵入的思考)、Hoarding(ため込み)、Ordering(整理整頓)、Checking(確認)への関連が見られた。「自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向」は、自身の行動に欠点や失敗があるように感じ、不安から何度も確認をしてしまう傾向である。自分が何か間違っているのではないかという侵入的思考に駆られ、必要以上に物をため込んだり、ミスを減らすために順序通りに整理し、確認を行うのだろうと考えられる。

以上の結果から、自己志向的完全主義と強迫症状の関連には、自尊感情が媒介する間接的な関連と、直接的な関連の双方が存在することが示唆された。したがって、強迫症状の理解や介入においては、完全主義の各側面や自尊感情を考慮することが重要である。

最後に、本研究の限界について述べる。本研究は一時点でのデータを利用した横断研究であるため、因果関係については言及できない。したがって、今後は縦断的な研究デザインを設定し、各変数の関連を詳細に検討することが望まれる。

付記

本研究は、信州大学大学院総合人文社会科学研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders, 5th edition: DSM-5*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕(監訳)・染谷俊之・神庭重信・尾崎紀夫・三村將・村井俊哉(訳)(2014). *DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き*. 医学書院.
- Bejerot, S., Ekselius, L., & von Knorring, L. (1998). Comorbidity between obsessive-compulsive disorder (OCD) and personality disorders, *Acta Psychiatrica Scandinavica*, *97*, 398-402.
- Chik, H. M., Whittal, M. L., & O'Neil, M. L. (2008). Perfectionism and treatment outcome in obsessive-compulsive disorder. *Cognitive Therapy and Research*, *32*, 676-688.
- Flett, G. L., Russo, F. A., & Hewitt, P. L. (1994). Dimensions of perfectionism and constructive thinking as a coping response. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, *12*, 163-179.
- Foa, E. B., Huppert, J. D., Leiberg, S., Langner, R., Kichic, R., Hajcak, G., & Salkovskis, P. M. (2002). The Obsessive-Compulsive Inventory: development and validation of a short

- version. *Psychological Assessment*, *14*, 485-496.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, *60*, 456-470.
- 剣持慈子 (2005). 完全主義における強迫的行為としての不決断傾向. 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, 155-156
- 小堀修・丹野義彦 (2004). 完全主義の認知を多次元で測定する尺度作成の試み. パーソナリティ研究, *13*, 34-43.
- Kuiper, N. A., & Olinger, L. J. (1989). Stress and cognitive vulnerability for depression: A self-worth contingency model. *Advances in investigations of psychological stress*, 367-391.
- Limburg, K., Watson, H. J., Hagger, M. S., & Egan, S. J. (2017). The relationship between perfectionism and psychopathology: A meta-analysis. *Journal of Clinical Psychology*, *73*(10), 1301-1326.
- Miegel, F., Moritz, S., Wagener, F., Cludius, B., & Jelinek, L. (2020). Self-esteem mediates the relationship between perfectionism and obsessive compulsive symptoms. *Personality and Individual Differences*, *167*, 110239.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討, *Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology*, *12*, 65-71.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義” と抑うつ傾向および絶望感との関係, *心理学研究*, *68*, 179-186.
- 指方賢太・徳重愛海・小澤永治 (2021). 大学生における強迫傾向と完全主義認知および精神的健康度との関連, *九州大学総合臨床心理研究*, *12*, 19-25.
- Sturman, E. D., Flett, G. L., Hewitt, P. L., & Rudolph, S. G. (2008). Dimensions of Perfectionism and Self-worth Contingencies in Depression. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, *27*, 213-231.
- Sugiura, T., & Sugiura, Y. (2015). Common Factors of Meditation, Focusing, and Cognitive Behavioral Therapy: Longitudinal Relation of Self-Report Measures to Worry, Depressive, and Obsessive-Compulsive Symptoms Among Nonclinical Students. *Mindfulness*, *6*, 610-623.
- Tolin, D. F., Woods, C. M., & Abramowitz, J. S. (2003). Relationship Between Obsessive Beliefs and Obsessive-Compulsive Symptoms. *Cognitive Therapy and Research*, *27*, 657-669.
- Tolin, D. F., Worhunsky, P., & Maltby, N. (2006). Are “obsessive” beliefs specific to OCD?: A comparison across anxiety disorders. *Behaviour Research and Therapy*, *44*, 469-480.